

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫



16世紀ヨーロッパのイエズス会は、日本の実質的権力者は地域の戦国大名と捉え、その領国をある程度独立した「国」と認識し、大名そのものを「国王」として評価していました(松本和也「イエズス会がみた『日本国王』」)。確かに、同時期の西欧系諸史料を読むと、各地の戦国大名を、例えば「尾張の国王」(織田信長)、「山口の国王」(大内義隆)、「河内の国王」(三好義継)などと表記しています。

1551年、西日本各地で2年3カ月にわたるキリスト教の布教活動を進めたイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルが離日します。その際、大内義隆・大友義鎮(宗麟)・松浦隆信の3大名は、インド副王のアフォンソ・デ・ノローニャに親書

インド副王アフォンソ・デ・ノローニャ 義鎮に優れた武器など贈与



を送りました。

ポルトガルは10年に、インド南部のビジャープル王国を攻め、マラバル海岸沿いのゴアの地を植民地として手に入れます。それ以降、ゴアは、ポルトガルのアジア進出の拠点となり、ポルトガル国王はインド副王を駐留させて、現地支配を統括させていました。そのインド副王の下に、日本からの親書を届けたのは、「豊後の国王」大友義鎮の家臣でした。江戸時代の儒学者新井白石は、その家臣の名を「植田玄佐」と推定して

います。玄佐は、ゴアの聖パウロ学院で洗礼を受けてロウレンソ・ペレイラと名乗りますが、その際に代父(受洗立会人)を務めたのは、インド副王のノローニャでした。

その後、ノローニャは、「日本で最も勢力のある豊後の国王」と称される大友義鎮に、「大友義鎮に優れた武器およびその他の品々」を返礼として贈ったことが記録されています。

実際、ヨゼフ・ウィッキ編「インド史料集」には、イエズス会の宣教師でありインド管区副管区長の地位にあったメルシオール・ヌーネス・バレットが、54年の日本渡航に携行した品々の一覧が収載されています。

まず、銀製十字架、キリストの十字架像、聖母マリアの祭壇背後の飾りついたて、錦織り祭服、白いビロード祭服、錦織り祭壇用天蓋などの祭具。次に、鉄砲、ガラス製の杯・器・ランプ、砂時計、手動時計、小型ナイフ、拡大鏡、真ちゅう製水差し、真ちゅう製喫煙具(きせる)、クリスタルグラス製取っ手付きコップ、ガラス製世界図などの物品。さらに、書籍では聖書や聖人名録から、プラトンやアリストテレス、プトレマイオスの書物に至るまで、さまざまな品物が、インド副王やポルトガル国王との外交関係を介して戦国時代の日本にもたらされたことが分かります。

11月1回掲載

ポルトガル植民地だったゴアの入り口に立つ「インド副王の門」